

(2015年度)

国語

次の文章は、小山田桐子『将棋ボーイズ』(幻冬舎文庫)の一節である。岩手県の岩北高校に通う栗原歩(くりはらあゆむ)は、所属している将棋部のある日の練習で、同じく部員の「名人」と対局した。本文はそれに続く場面である。これを読んで、後の問いに答えなさい。なお、本文中の太字で書かれている語句(例「歩」)は将棋の駒の名前である。

いつもどつしりと、おだやかな名人が珍しく少し荒々しい目をした。

「去年、C級で優勝したからさ、最後になる今年はB級で優勝しようと思ってる。歩は？」

「僕は……」

何も考えていなかった。合宿でB級に入ることができたので、大会でもB級でやれるかもしれないと⑦ヒソかに期待していただけだ。名人の④センゲンを聞くと、自分が⑤コウジョウシンもない人間に感じられて、歩はつい「A級に出ようかな」と口走っていた。一度口から出た言葉は取り返しがつかない。①耳まで赤くなった歩に、名人は一瞬目を丸くしてから、嬉しそうに笑った。

「いいじゃん。A級、挑戦しなよ。先生に相談してさ。まだ、詰めが甘いところあるけど、大会まできっちり⑤タイサクしたら、きっと行けるよ。ねえ、先生」

ぎよつとして名人の視線の先を見ると、一度、立ち去ったはずの本郷先生がいる。なんで今度は④ケハイがないんだと恨めしく思いながら、背を丸める。

「歩……A級いいかもな」

思ってもみない言葉に、口がぽかんと開いた。

「……でも、僕、今も負けちゃいましたし……B級でも全然安定して勝てないと思うんですけど」

「B級で実績積んでもいいけど、早いうちにA級の空気を味わっておくのも、いいかもしれん。どうも、歩は空気に呑まれそうだからな」

決めるのはお前だからと言い残して、また先生は部室内の巡回を続ける。その背中を見ながら、歩は今の状況にびつたりのことわざが確かあったなとぼんやり考えていた。

「あ……ひょうたんから駒だ」

歩のつぶやきを②ヒロった名人がおっとり「なんのこと？」と尋ねる。歩はなんでもないと言を横に振る。さっきまであれほどたくさんいた部員は歩たちを除くとあと二組ほどしかない。歩たちは駒と将棋盤を黙々と片づけ始めた。

「そうそう」

名人は丁寧に駒をケースに③オサめる。

「ひょうたんから駒の駒って、※のことだって知ってた？」

「え、将棋の駒じゃないの？」

「違うんだって。僕も一昨日、知った。それまで、歩ぐらい頑張れば出てくるんじゃないかと思っててさ」

「確かに」

歩は笑う。思ったより大きな笑い声が出て、自分が今高揚していることを知る。④タブン、先生がA級に出ることを⑤ヒテイしなかったからだ。そんなの無理だと言わなかったからだ。それだけのことがこんなに嬉しいんだと②自分の単純さがおかしくて、また笑みが漏れた。

A級に出ようか、それとも、B級に出ようか。帰り道、歩はずっと考えていた。③迷うことがなんだか嬉しくて、④飴(あめ)をかまずに最後までなめ尽くす小さな子供のような真摯(しんし)さで、ああでもないこうでもないと考え続けた。玄関のドアを開ける頃には、A級に挑戦するという方に気持ちは大きく傾いていた。

「ただいま」

歩の家は二階建ての一軒家だ。部屋数も多く広いのだが、何せ祖父が若い頃に建てた古い家だ。母は不便だ、不便だとしょっちゅう愚痴(ぐち)をこぼしていた。

何より不便なこととして母が真っ先にあげるの、その寒さだ。家の③スベてを温めるのはまず不可能なので、栗原家では人がいる部屋だけ、集中的にストーブで温める。母は皆で一か所に集まれば経済的なのとよく口にするのだが、それは母のトークを聞き続けるということであり、皆、寒い廊下を早足で移動し、自分の部屋に逃げ帰る。

春になっても、古い家はまだまだ底冷えするため、ストーブがなかなかしまえなかった。玄關を上がり、スリッパを通して伝わってくる冷気に耐えながら廊下を進むと、台所で母と話す妹の声が聞こえてきた。

「ねえ、塾の全国模試で18位ってすごいでしょ？　ずっと言ってたワンピースお願い！」

「そりゃあ、すごいけどねえ」

台所をのぞき込み、少しためらって、ただいまと声をかけようとした途端、母がぱっと歩の方を見て、小さな声を上げた。

「嫌だ、びっくりした。何そこでお化けみたいにぼーっとつつ立ってんの」

④「……ただいま」

口から出た途端、消えてしまうような小さな声で言っ、台所を離れる。

「ねえ、ちよつと、歩」

足を止めて、しぶしぶ振り返る。

「今日、晩ご飯、何食べたい？　お母さん、パートで遅くなって今からご飯作るんだけど」

「……なんでもいいよ」

「そういうのが一番困るのよ」

「……じゃあ……カレー」

「お兄ちゃん、普通に考えて、今から煮込むの大変でしょ」

妹がたしなめるような口調で言う。「ごめん」と歩は反射的に謝った。

「お刺身かなんかでもいいよ、お母さん」

「そう？　じゃあ、スーパー行ってこようかね。特売になってるかもしれないし」

妹の提案に、母がエプロンを外しながら、財布をつかむ。今日はお刺身かと思いつながら、その場を離れる。

夕食のリクエストもうまくできない⑤自分がおかしくてうっすらと笑う。

階段を上りながら、全国で18位かと思う。すごい成績だ。A級に出るかもしれないことぐらいで、はしゃいでいた自分が途端に情けなく思えて、口元の嘘の笑顔もゆっくりと消えた。

夕食のメニューはやはりお刺身だった。歩への気づかいなのかもう一品用意されたサバのフライはカレー味だった。夕食の間、母はいつものように切れ目なく話し続ける。妹はワンピース購入を確実にしたためか、いつになく愛想よく相づちを打っている。

「で、今日は部活どうだったんだ？」

母が席を立ったときに、祖父が尋ねた。歩が「別に」と答えても、彼は根気強く質問を投げかけ、結局、歩はA級に出るかもしれないという話を口にしていた。

「へえー、ついにA級にねえ。そりゃ、大出世だ。立派なもんだ。先生は歩の才能が分かってらっしゃるんだよ」

祖父はいつも以上に歩をほめちぎる。歩は⑥居心地の悪さに思わず身じろぎした。

「でも……A級に出るかもって可能性の段階なんだろ」

のどを鳴らしながらビールを飲んだ父が口をはさむ。最近、めっきり酒に弱くなった父は、缶ビール1本で顔を赤くしている。

「そうだけど……どのクラスに出るか決まりはないから、自分が出ようと思えば出られるよ」

「でも、だからこそ自分の实力に見合ってるかっていうのが大事なだろう」

父が鼻を鳴らす。

「無理して実力以上のところに出たって意味はないだろ。そこで成績を残せない」と

「だから、お前はもうどうしてそうやって頭から決めつけるんだ。歩の力をよく知る先生が認めてくれているんだぞ」

険しい口調の祖父に、父はグラスにビールを注ぎながら、淡々とした口調で応じる。

「お父さん落ち着いてくださいよ。先生は歩にA級の力があるって言ったんじゃないんですよ。A級に出ることを止めなかっただけです。それを拡大解釈して、舞い上がって、恥をかくのは歩なんですよ」

自分は先生の言ったことを拡大解釈して、舞い上がっていただけなのか。そして、恥をかくことになるのか。

あまりにも乱暴な決めつけように、さすがにそのとおりだとは思えなかった。しかし、父の言葉が何の傷も与えなかったわけでもない。父の中の自分の評価が高いとは思っていなかったけれど、ここまで低いのかと思うと⑦すつと体が冷たく硬くなった。

「何の話？」

父のためのつまみを手にした母が戻ってくる。父が面倒くさそうに説明すると、母は「あら、いいじゃない」と無責任に明るい声で言った。

「強いライバルがたくさんいる方が、きっと歩も頑張れるだろうし」

「歩はそういうタイプじゃないだろう……人一倍ゆっくり確実にやった方がいい。九九だって、自転車だって、早くやらなきゃいけないとプレッシャーを感じるたびに、いつも失敗してきたろうが」

⑧「僕……A級に出るよ」

思ったよりしつかりした声が出た。食卓が一瞬しんとする。歩はもう一度、自分自身にもセンゲンするように繰り返した。

「僕、A級に出るよ」

「よく言った！」

祖父が喜色満面で手を叩く。

「いいじゃない。へえ、楽しみね」

ワイドショーで浮気を追及され、しどろもどろになる芸能人を見ながら、母が軽く言う。父は無言で新聞を広げた。

「……まあ、お前の人生だからな。お前がいいならいいんじゃないのか」

だいぶ間を置いて、まったくいいとは思っていない口調で父が言う。それでも父が一応は肯定的な言葉を口にしたことに、歩は小さな勝利を感じた。

しかし、そんな小さな勝利も長くはもたなかった。部屋に戻ってすぐ、ゆっくりと後悔のような気持ちが押し寄せ、きてベッドに突っ伏す。頭のイメージの中で、ひょうたんから飛び出た※が鼻息荒く暴れまわっていた。

A級に出ると決めたことよりも、A級に出るということをもるで武器であるかのように振りかざしたことに後悔があった。もつと大事に、一人できちんと考えて、きちんと決めたかったのに。

ノックの音がする。のろのろと体を起こしてドアを開けると祖父が立っていた。

「将棋やらないか。A級に挑戦するんだし、一局でも多くやった方がいいだろう」

「……今日はいいよ。そんな気にならないから」

「なんでだ。お父さんをギャフンと言わせてやりたいと思わないのか」

「……⑨そういう風な気持ちではやりたくないよ」

「そういう心根の正しさはお前のいいところだが、ナニクソと思う気持ちも時には力になるんだぞ。あいつはどうもお前の力を過小評価してる。歩だとあなどってるんだ。私はそれが悔しくてならない。お前は悔しくないか？ 自分は金だと証明したくないか？」

祖父の手が、両肩にかかる。その体温と重さが妙に生々しく、からみつくようで、歩は咄嗟（とっさ）に振り払った。祖父は振り払われた腕をだらんと垂らして、ただただびっくりしている。

「……そういうのも、ちよつと苦しいんだ」

⑩自分でも心が冷えるほど冷たい声が出た。

「勝手にヒテイされるのも嫌だけど、勝手に期待されるのもしんどいよ。おじいちゃんは僕の味方になっていつも励ましてくれるけど、時々、僕じゃなくて、おじいちゃんの中の理想の僕に話してるんじゃないかって思う時がある。歩から金になれて言われるたびに、今の自分はダメだって言われてる気になる」

まるで体に害のあるものを飲み込んだ時の吐しゃ物のように、言葉が口からとめどなく流れ出す。

「そんな風に……感じていたのか……それは……悪かった。……どうも、混乱していて、うまく言葉が見つからない。また、明日にでもゆっくり話そう」

しゃがれた、力のない声だった。

「ひとつだけ、これを言うのもお前には負担になってしまふのかもしれないが……今のお前がダメなんて、そんなことは絶対にない」

ドアがゆっくりと閉まる。歩はそのドアにもたれるようにしてしゃがみ込む。

その途端、図ったようにメールの着信音が届き、歩は思わず、のけぞりドアに頭をしたたかにぶつける。頭を押さえながら携帯電話をチェックすると、妹の香織からだった。

お互い一応アドレスは知っていたけれど、実際送り合うようなこともなかったもので、ドキツとした。「ああいうのやめてほしいんだけど」というタイトルのメールは、かなりの長文だった。

「ご飯食べてる時、お兄ちゃんのことでお父さんとおじいちゃんが言い合うみたいなき感じになるの、すっごい迷惑なんだよね」

それは自分のせいじゃないと思った。しかし、その反応を見すかしたように妹は次のように続ける。

「お兄ちゃんはそのせいじゃないと思ってるでしょ。確かに、お兄ちゃんは悪くない。でも、私が言いたいのは、お兄ちゃん自身のためにも、もつとうまくやってること。お兄ちゃんは正直すぎるんだと思う。心配な相手が心配するだろうってネタそのまま言っちゃダメじゃん。伝える情報はコントロールしないと」

妹は自分の模試のことを例に挙げた。母に全国18位だと伝えたけれど、実は全国でそのテストを受けたのは50人ほ

ど。実際は平均的な成績なのだという。

「きつとお兄ちゃんは嘘だと言って嫌な顔するだろうけど、ちょっといいように誤解してもらおうぐらいの嘘って私は大事だと思う。だって、その方がお互いストレス少なく過ごせるもん。ということ、まあ、無理だと思うけど、食事中ぐらい気持ちよく過ごしたいので、できるだけ気をつけてください。」

追伸・模試のことお母さんに言ったら、一生許さないで」

携帯を壁に投げつける。⑩くだけてしまえばいいと思うほどの気持ちで投げたはずなのに、携帯はコンというかな音を立てただけで、無傷で床に転がる。ただ、壁には小さな凹みができてしまった。小さいのにやけに目立つその凹みを見て、なにやってんだろうと思った。

問1 — ⑦③について、カタカナを漢字に直しなさい。

問2 — ①「耳まで赤くなった歩」について、このときの気持ちをわかりやすく説明しなさい。

問3 — ※に共通して入る動物の名前を漢字で答えなさい。

問4 — ②「自分の単純さがおかしくて」について、このときの気持ちを、——⑤「自分がおかしくて」との違いがわかるように説明しなさい。

問5 — ③「迷うことがなんだか嬉しくて」について、「歩」にとって「迷うこと」が「嬉し」いのはなぜか、わかりやすく説明しなさい。

問6 — ④「『……ただいま』について、このときの「歩」の気持ちとしてあてはまらないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 妹の話に比べたらA級のことは見劣りするかもしれない

イ 別にそんなにぼんやりしているつもりはないんだけど

ウ 今日の部活の話を切り出すきっかけを逃したかなあ

エ 今は母にあれこれ変なことを言われたくないなあ

オ 何度も同じことを言わせないでほしいんだけど

問7 — ⑧「『僕……A級に出るよ』について、このときの「歩」の気持ちを表したものとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 自分を高く評価してくれない父の乱暴な決めつけ方に逆らいたいと思っている

イ 塾の全国模試で18位という好成绩を残した妹に負けてなるものかと思っている

ウ 父の言葉に傷ついているときに無責任に明るい声で話す母にいらいらしている

エ 手強いライバルがたくさんいるであろうA級に出る方が頑張れると思っている

オ 本郷先生がA級に出るのを止めなかったことを拡大解釈して舞い上がっている

問8 — ⑨「『そういう風な気持ちではやりたくないよ』について、「歩」はどのような気持ちで将棋をしたいのか、わかりやすく説明しなさい。

問9 — ⑩「自分でも心が冷えるほど冷たい声が出た」について、このときの気持ちを、——⑦「ずっと体が冷たく硬くなった」との違いがわかるように説明しなさい。

問10 — ⑪「くだけてしまえばいいと思うほどの気持ち」について、なぜこのような気持ちになったのか、七十字以上八十字以下で説明しなさい。

問11 — ⑥「居心地の悪さ」について、あなたがこのような気持ちになったときの経験を具体的に教えてください。

(2015年度)

国語 解答用紙 その2

11

受験番号
氏名